

そうだったの!?

言葉や国語について考えるこの欄は、リニューアルした2012年夏号から始まった。
文化庁の「国語に関する世論調査」などを参考にしている。

けれども

ファミリーレストランはオモシロ言葉のデパートだ。

『ご注文は以上でよろしかったでしょうか』。「よろしい」でよろしい。『ハンバーグになります』。手品をするのかと身構えた。「ハンバーグです」で十分だ。レジでは『1万円からお預かりします』。「から」はいらない。気になりだすと食事どころではなくなる。

テレビ画面に、ラジオからも『けれども』言葉が相次ぐ。「けれども」は前の文を否定するときに使うと習ったが、最近は使い勝手のいいつなぎ

役になっている。

プロ野球が始まると、リポーターが『こちら一塁側ですけれどもホームランを打った阿部選手の談話ですけれども、まず打った球ですけれども〜』。「けれども」が人間なら疲弊しているだろう。

ちょっとしたことを知っている、評価が変わる。『早急』は「さっきゅう」が正しい読み方だったが、読み方を知らない人たちが「そうきゅう」と言ってしまう、それが広まった。国語審議会でも「そうきゅうでもよい」と渋々認めた。「さっきゅう」と読めば、分かる

人には分かる。

『姑息な人ね、あの人』。ひきょうという意味で使われることが多いが、『姑息』は「一時しのぎ」「一時のがれ」と答えたい。「姑」にはしばらくの意味があり、「息」は休みの意から、一時の間に合わせだ。

『姑息な手段をとる』とは、ひきょうな手を使うのではなく、一時、のがれることをいう。

正しく理解している人は15%。誤用で使っていた人は71%。国語に関する調査2010年版(文化庁)で分かった。姑は誤解されやすいのか。